

公立小学校における校内研究と教師の学び

—図画工作科教育研究推進校での実践事例の検討—

金子 智栄子*・金子 進一郎**・金子 功一***・鈴木 貴久**

川崎市教育委員会から、平成 24・25 年度の図画工作科教育研究推進校として指定された公立小学校 1 校（教員 19 名、1・2・4・5 学年各 1 クラス、3・6 学年各 2 クラス、特別支援学級、全校児童 253 名）における実践研究を精査して、教師の学びを検討した。教師の学びには学年差だけでなく、研究実践での役割の相違がみられた。研究主任は研究指導の専門性を向上させ、子どもの成長を実感し、研究推進委員は子どもの実態にあったテーマ設定の重要性を学んでいた。一般教員も授業づくりの理解を深めていた。それぞれの役割において共通していた学びは、人間関係を良好に保つことの重要性であった。多忙な職務をこなしていく中で、教員が校内研究を行っていくためには、教員間の関係性を良好に保つことが重要であることが明らかとなった。さらに、校内研究のテーマの設定、組織体制、研究授業の方法、研究主任と研究推進委員の役割、管理職の役割の 5 つの観点から、校内研究を効果的に推進するポイントについて論じた。本研究により、図工という教科を通して、校内研究を効果的に推進するための具体的方法が明示された。

Key Words：教師の学び，校内研究，教育研究推進校，図画工作科，公立小学校

1. はじめに

川崎市教育委員会は A 公立小学校（以降：A 校）を平成 24、25 年度の図画工作科教育研究推進校に指定した。A 校は教員 19 名、全校児童 253 名（1・2・4・5 学年各 1 クラス、3・6 学年各 2 クラス、特別支援学級）の小規模校であり、自校の研究紀要において、子どもたちの学びを発表しているが、本研究は教員の学び、校内研究を成功に導くポイントを検討することを目的とする。

学習指導要領の改訂（文部科学省、2011）とともに、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和

が重視され、さらには基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力などの習得をはかることによって培っていく「生きる力」がクローズアップされてきた。この「生きる力」において図画工作科は、創造することの楽しさを感じるとともに、思考し判断し、表現するなどの造形的な創作活動の基礎的な能力を育てること、生活の中の造形や美術文化に関心をもって、生涯にわたり主体的にかかわっていく態度を育むことを目標としている。そのため、図画工作科においても「生きる力」を育むことができるような授業について研究を行うことは、意義あることだと考える。一方、降旗（2011）は、小学校教員の実態とし

* 人間学部児童発達学科

** 川崎市立東大島小学校

*** 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

て図画工作科の研究授業の実施経験は少なく、教職経験豊富なベテランでもその指導に苦手意識をもっている教員も少なくないことを指摘している。さらに、教育研究推進校ともなれば、研究紀要作成や発表会に向けての準備などで多忙となり、教員の反発も強くなると考える。また、子どもの変容については明らかにされているものの、このような教育研究推進校において教員の学びを詳しく検討した研究は、筆者らの知る限りでは見当たらない。そこで、図画工作科の教育研究推進指定を受けたA校の実践を取り上げ、教員の学びと研究推進に関する工夫を研究者の立場から明らかにすることにした。

2. テーマの設定

校内研究のテーマを設定するために、図画工作科を通して子どもがどのように学んでほしいのかについて教員同士で話し合ったところ、「自分の思いを恥ずかしがらずに、いきいきと表現していきえるようになってほしい」という『表現』に関する意見、「友達と作品を見合い、互いの良さを認めあえるようになってほしい」という『認めあいやかかわりあい、学びあい』に関する意見があげられた。そこで、小学校学習指導要領図画工作科（文部科学省、2011）の教育目標や学校教育目標を参照し、研究テーマを『自分をいきいきと表現し、学びあう子』と設定した。また、図画工作科の教科目標は『表現及び鑑賞活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う』であり、『はずむ』、『ひろがる』、『つながる』が評価の観点となっている。そこで、サブテーマを「はずむ、ひろがる、つながる～人・もの・場所とのかかわりを通して～」と設定した。A校の学校教育目標と図画工作科の教科目標との関連を図1に記した。

3. 授業研究の方法

1) 指導案の検討

指導案の検討に際しては、まず、学年ごとに指導案を作成し、低・中・高学年のブロックで検討した。さらに、推進委員会にて検討を重ねて、研究テーマに沿って指導を計画し、題材を選択して教材研究を行った。指導案の検討の流れについては、図2を参照。

2) 研究組織

全教員は研究全体会に所属し、推進委員会、学年部会、プロジェクト会議が組織された（図3）。推進委員会の委員には、校長、教頭、特別支援学級（以降：あおば学級）、各学年から1名が選出された。推進委員会では、校内研究の全体計画および運営方針、授業研究における指導案の検討を行った。推進委員会と並行して、あおば部会、低学年部会、中学年部会、高学年部会からなる学年部会も構成された。学年部会では主に、各教科との関連を図りながら、指導計画の見直しをもち、日常生活での子どもの変容についての情報交換を行った。研究全体会は、研究テーマや研究内容、研究授業の方向性を全教員が共通に理解することを目的として、実施された。なお、推進委員会や研究全体会では、外部講師からの専門的な意見も取り入れながら議論がなされた。

プロジェクト会議は、子どもたちの教育環境の整備を目指して実施され、ものプロジェクト、人プロジェクト、場所プロジェクトの3つから構成された。ものプロジェクトは推進委員会が担当し、各学年の子どもたちが授業時にいつでも使うことができる用具や材料を整備した。また、人プロジェクトは、授業参観や図工新聞などを通して校内研究での子どもの学びを保護者（家庭）に伝え、場所プロジェクトは、子どもの作品を学校の様々な場所で展示することで、作品に触れる機会を増やした。

3) 研究授業の検討時における体制

研究授業の実践直後に、色分けされた付箋に意

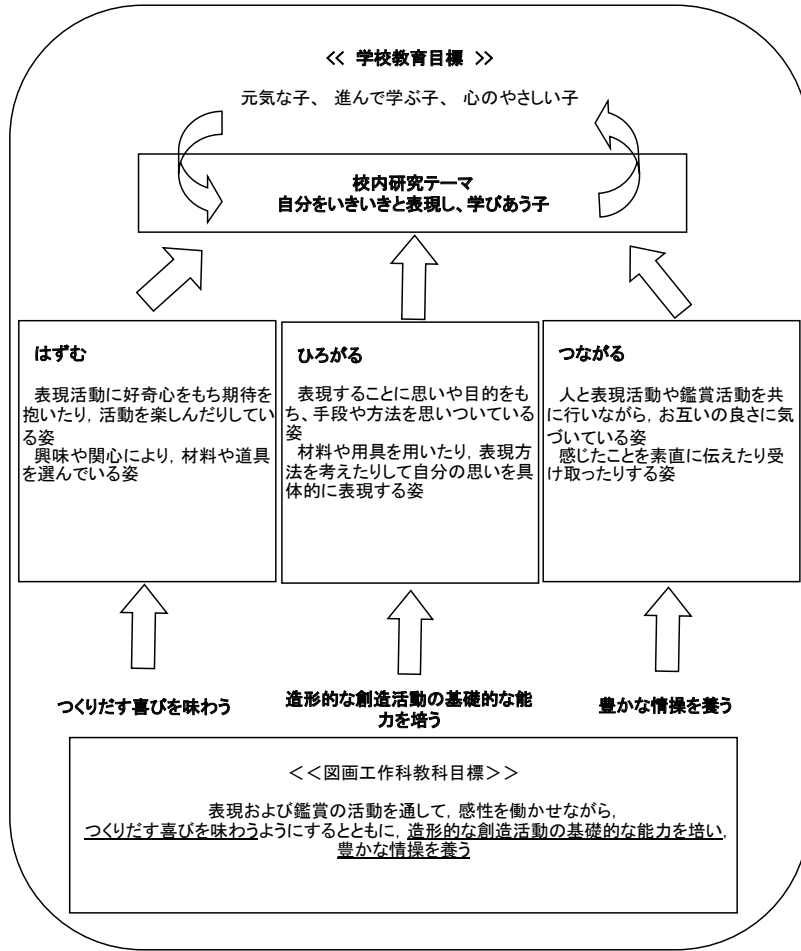


図1 学校教育目標と図画工作科の教科目標の関連

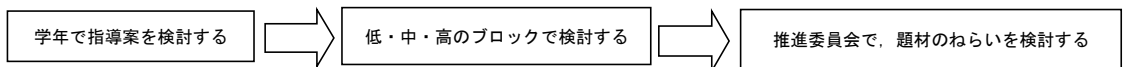


図2 指導案の検討の流れ

見を記入し、それを模造紙に貼ることで意見の分類を行った。また、職員室にその模造紙を置き、分科会に参加できない教員の意見も反映できるようにした。分科会においても意見の分類を行い、全体会では分科会で協議された内容の報告がなされるとともに、外部講師からの講評も行われた。研究授業の検討時における体制の詳細については、図4を参照。

4) 研究会の日程

平成25年度を例に研究会の日程を表1に示す。研究授業は各学年1度、計5回開催された。また、推進委員会は主に研究授業前後に開かれ、計10回と最も多く開催されていたことから、校内研究の全体計画などの議論が詳細に行われたと思われる。そして、推進委員会と並行してプロジェクト会議が5回開催された。研究全体会は4回行われ、研究授業の方向性などを全教員が把握できるよう

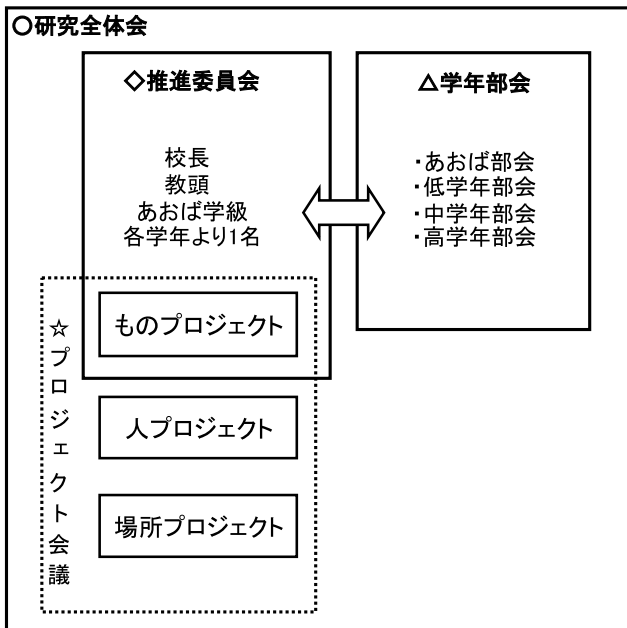


図3 平成25年度の研究組織図

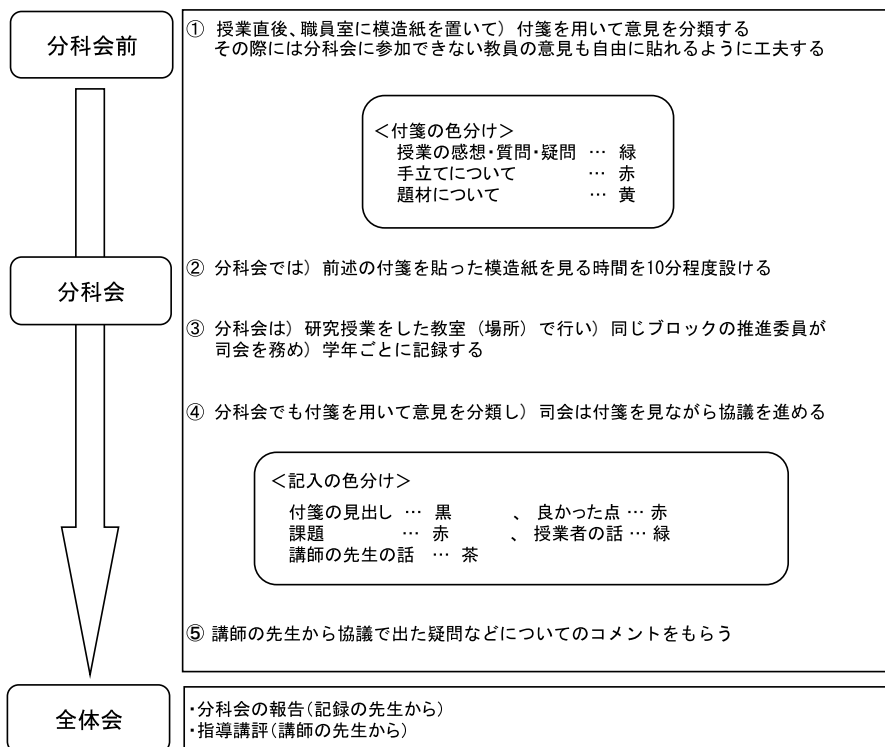


図4 研究授業の検討時における体制

表1 平成25年度の研究会の日程

月	日	内 容
4	16	◇ 第一回 推進委員会
	24	◇ 第二回 推進委員会
5	9	○ 第一回 研究全体会
	20	☆ 第一回 プロジェクト会議
6	3	◇ 第三回 推進委員会
	14	※ 第一回 研究授業 (第1学年)
	22	◇ 第四回 推進委員会
7	3	※ 第二回 研究授業 (第2学年, 第5学年)
	18	☆ 第二回 プロジェクト会議
8	23	・ 職員研修会 (図画工作科における題材研究と評価の仕方)
	30	○ 第二回 研究全体会
9	10	◇ 第五回 推進委員会
	25	※ 第三回 研究授業 (あおば学級, 第3学年1組2組)
10	10	※ 第四回 研究授業 (第4学年) ☆ 第三回 プロジェクト会議
	17	◇ 第六回 推進委員会
	23	○ 第三回 研究全体会
11	1	※ 第五回 研究授業 (第6学年1組2組)
	8	◇ 第七回 推進委員会
	11	☆ 第四回 プロジェクト会議
12	6	◇ 第八回 推進委員会
	11	★ 研究推進校報告会 (第1学年, 第4学年, 第5学年)
	24	◇ 第九回 推進委員会
1	10	○ 第四回 研究全体会
	20	☆ 第五回 プロジェクト会議
	30	◇ 第十回 推進委員会

な体制を備えていた。

4. 研究授業の取り組みと子どもの変容、および教員の学び（A校の図画工作科研究紀要をもとに筆者らが独自にまとめた）

1) あおば学級：1・5・6年生は各2名、2・4年生は各1名で、計8名（男子6名、女子2名）

(1) 研究目標：初歩的な造形活動によって、造形表現についての興味や関心をもち表現の喜びを味わうようにする。授業研究例は『はこで、た〜くさん、あそぼう』。紙箱や段ボールを「並べたり」「重ねたり」することを通して、友だちとともに思いを共有できることの心地よさを気づかせることがねらいである。

(2) 子どもの変容：つくることを楽しみ、集団で協力して活動するようになった。

(3) 教員の学び：学年の異なる子どもたちが混在するクラスであり、低学年の子どもへの援助が中心となりやすく、高学年の造形活動への配慮が必要であることを実感した。

2) 低学年：第1学年は計29名（男子13名、女子16名）、第2学年は計35名（男子22名、女子13名）

(1) 研究目標：①進んで表したり見たりする態度を育てるとともに、つくりだす喜びを味わうようにする、②造形活動を楽しみ、豊かな発想をするなどして、体全体の感覚や技能などを働かせるようにする、③身の回りの作品などから、面白さや楽しさを感じ取るようにする。第1学年の授業研究例は『マジックキーで、あそびにおいでよ』で、事前に「100かいだてのいえ」の絵本を視聴し、不思議な鍵から子ども各自が自分なりの部屋を想像する内容であった。第2学年の授業研究例は『え!?こんなものまで?とんでけピョーン!!』で、教員は事前に何のおもちゃをつくるのかは伝えることをせずに、授業時に「空飛ぶおもちゃ」をつくるように指示した。

(2) 子どもの変容：第1学年では、実体験からイメージを広げられる題材を使うことによって、共通した経験を題材に生かすことができた。また、そのことによって子ども同士がお互いの表現に関

心をもつことができた。第2学年では、研究授業を通して子どもたちの意識が広がり、自分の活動が充実することで満足感を得て、自然と友だちへの作品にも関心をもつようになった。

(3) 教員の学び：第1学年は、年齢によって子どもは異なる経験をしていくが、それを題材としてどのように計画的に取り入れていくのかという課題を見いだした。第2学年は、人とのつながりを深めるためには、子ども自身の経験を充実させて子どもの意識を広げることが大切だと学んだ。

3) 中学年：第3学年1組は計22名（男子11名、女子11名）、2組は計19名（男子10名、女子9名）、第4学年は計36名（男子17名、女子19名）

(1) 研究目標：①進んで表したり見たりする態度を育てるとともに、つくりだす喜びを味わうようにする、②材料などから豊かな発想をし、手や体全体を十分に働かせ、表し方を工夫し、造形的な能力を伸ばすようにする、③身近にある作品などから、よさや面白さを感じ取るようにする。第3学年の授業研究例は『きったり・くんだり・なんでも〜クミクミックス〜』で、段ボールを使って切れ込みを入れたり、組んだりしながら自由に作品を表現した。第4学年の授業研究例は『形を楽しもう』で、身近にあるものをいろいろな角度から写真を撮ることで、同じものに対する見方を変えることの大切さに気づく内容であった。

(2) 子どもの変容：第3学年では、表現することの楽しさを教えることにより、年度当初よりも自信をもって表現できるようになった。第4学年では、図工が苦手な子どもが友だち同士で良さを認め合ったりすることを通して、楽しんで作品をつくる様子がみられた。

(3) 教員の学び：第3学年は、図工の楽しさを伝えるだけでなく、扱う用具に関する指導や技法などを身につけさせる重要性を学んだ。第4学年は、新しい素材や用具（例えば：デジタルカメラ、彫刻刀など）に出会ったときに子どもたちの意欲が高まることに気づいた。また、新しい素材を設定するときには、活動する場所の重要性を学んだ。

4) 高学年：第5学年は計29名(男子19名, 女子10名), 第6学年1組は計27名(男子13名, 女子14名), 2組は計26名(男子13名, 女子13名)

(1) 研究目標：①創造的に表現したり鑑賞したりする態度を育てるとともに、つくりだす喜びを味わうようにする、②材料などの特徴をとらえ、想像力を働かせて発想し、主題の表し方を構想するとともに、様々な表し方を工夫し、造形的な能力を高めるようにする、③親しみのある作品などから、よさや美しさを感じ取るとともに、それらを大切にするようにする。第5学年の授業研究例は『心の樹』で、アルミ製の針金を自由に曲げたり、組み合わせたりするなど立体的に表現することによって、「5年生の今の自分」を表現した。また、自分の作品を自然教室のキャンドルファイヤー時に飾るようにすることで、違った雰囲気の中で作品をみる良さを感じられるように考慮した。第6学年の授業研究例は『岡本太郎を感じちゃおう』で、岡本太郎の作品を鑑賞し、その作品から感じる自分の思いについて考えさせた。

(2) 子どもの変容：第5学年は、自分の表現にこだわりながら、試行錯誤していきの様子が見られた。第6学年は、子どもたちが「やってみたい」、「つくりたい」と思えるような題材を設定したことで、活動に対する子どもたちの興味が持続し、意欲的に造形活動に取り組む姿が見られた。また、鑑賞する活動を繰り返し行うことによって、個々の作品の表現方法の違いなどに気づくことができた。

(3) 教員の学び：第5学年は、自分の作品を鑑賞することを通して、作品を客観的にとらえさせることが重要であることに気づけた。第6学年は、題材選びの難しさ、子どもの興味に合わせた題材を選択する重要性を学んだ。

以上により教員の主な学びを概観すると、あおば学級や低学年では、作品づくりの時間に個人差があり、子どものペースに応じて作品づくりを調整する必要性を学んでいた。中学年では、子どもの図画工作への意欲が新しい素材や用具に出会ったときにも高まること、高学年では、鑑賞を通して客観的に作品をとらえることや子どもの興味に

あわせて題材を選択する大切さに気づき、学年による教師の学びに相違があることがうかがえた。

5. 校内研究実践者における学びの分析(自由記述のデータ分析)

研究実践者の役割別に代表者を1名選出して、工夫、困難、学びについて自由に記述をしてもらった。回答内容をもとに筆者らで検討し、要約をカッコ内に示す。

1) 研究主任(教職歴：9年, 30代男性)

(1) 研究主任としてどのような工夫があったか？
①全教員で研究を推進する意識を高めたり、一人ひとりの意見を尊重することによって、「役割の明確化」や「協議の意義や方向性の理解」を行った(教員が一体となって取り組む体制づくり)。

②指導案の作成に際しては、1・2学年、3・4学年、5・6学年の各ブロックでの検討を行った(発達段階別の指導案の検討)。

③分科会では、意見を付箋に書くことにより、研究授業での些細な課題に対しても反省につなげるように工夫した(授業の振り返りへの工夫)。

④図画工作の評価では完成した作品のみを評価するのではなく、「思考・判断・表現」の評価点をもとに課題に取り組んでいる子どもの姿から評価した(評価の明確さ)。

⑤2年間の研究成果を引き継げるように意識した。研究のサブテーマである「ひと・もの・場所」に関するプロジェクトを立ち上げることで、研究後の環境整備についても検討した(研究成果の持続性)。

(2) 研究を推進するにあたり、どのようなことが困難だと感じたか？

①全教員が同じ方向性のもと校内研究を推進しているかどうかに関して確認する機会がなかった(教員の研究姿勢への懸念)。

②校内研究での子どもたちの成果がはっきりとしなかった(学習成果の不明確さ)。

(3) 研究を推進するにあたり、教員の立場としてどのような学びがあったか？

①研究主任ということで多くの書籍を読み、研究

主題のもと日々の授業を積み重ねた（**図画工作科研究指導の専門性の向上**）。

②研究を通して、多くの先生方と交流の機会をもつことができ、職員が一致団結して取り組むことは大きな成果につながる事が実感できた（**教員同士の交流の大切さ**）。

③校内研究を通して作品自体に子どもの成長を感じることができた（**子どもの成長における実感**）。

以上のことから研究主任は、図画工作における研究指導の専門性を高め、教員が一体となって取り組む体制づくりや発達段階にそった指導案の検討、評価の明確さの工夫、研究成果の持続性に関しても配慮していた。研究を推進する過程において、教員の研究姿勢に懸念したが、教員同士の交流の重要性や子どもの成長を実感していた。

2) 研究推進委員（教職歴：6年，20代男性）

（1）研究推進委員としてどのような工夫があったか？

①先生から絵を描くことや作品作りが苦手だという意見があり、外部講師を招いた実技研修会を開催した。実技を通して図画工作の教科としての魅力の紹介や題材開発のヒントにつながるような実践的な検討を行った（**図画工作への苦手意識の克服**）。

②実践の成果である作品を美しく、見やすく掲示することで、図画工作への意識を広げ、校内環境を整える工夫を行った（**成果としての作品の公開**）。

（2）研究を推進するにあたり、どのようなことが困難だと感じたか？

①研究推進の難しさは、教員の意識を研究に向けることであった。それは、研究という大きな課題を背負うことは日頃の業務がさらに増えることを意味している。実際、授業実践とその成果を報告する準備などの負担から、指定校の依頼への受諾することに職員室は雰囲気は良くはなかった（**多忙による研究推進の難しさ**）。

②推進委員会では、子どもの実態にあうような取り組みを重ねることの大切さを合言葉に、この研究を行うことによって、校内全体でどのような子どもが育つのかというイメージを持つように意識

した（**研究成果の波及**）。

（3）研究を推進するにあたり、教員の立場としてどのような学びがあったか？

①教員それぞれの業務内容や事情に合わせて研究を進めていく過程で、職員室での人間関係を常に良好に保つことを重視していた（**教員同士の人間関係の大切さ**）。

②子どもの実態からテーマや手立てを設定し実践すると、子どもの成果として現れるやすいことがわかった。教員間全体でテーマを共有することで、子どもの成果や課題についてぶれることのない協議ができた（**子どもの実態にあったテーマ設定の重要性**）。

以上のことから研究推進委員として、教員の多忙さを実感しながらも、図画工作への苦手意識を克服するよう工夫していた。そして、教員同士の人間関係を良好に保つことや子どもの実態にあったテーマの設定の重要性を学んでいた。

3) 一般教員（教職歴：4年，20代女性）

（1）校内研究をより有効に行うためには、どのような工夫が必要だと思うか？

授業づくりや指導案の検討における各学年部会などでの話し合いを通じて、多くの教員で話し合う機会を設けた。また、授業後の分科会や全体会では、少人数で話し合うだけではなく、外部講師の先生を含め検討する大切さも学べた（**教員同士で話し合う必要性**）。

（2）校内研究を通してどのようなことが困難だと感じたか？

図画工作の題材の活用法がわからなかったのを、他の教員に聞いて学んだ。作品の良し悪しではなく、活動の中での工夫や学びをどのように評価するのが難しかった（**授業の工夫や評価の難しさ**）。

（3）研究授業を通して、教員としてどのような学びがあったか？

図画工作科の授業づくりへの理解が深まり、子どもの実態に合わせた授業実践の重要性を学んだ（**授業づくりへの理解**）。

以上のことから一般教員は、授業づくりへの理解の深まりを実感する一方で、授業実践における工夫と評価の難しさを挙げていた。また、校内研究の有効性を高めるためには、教員同士で話し合う必要性を指摘していた。

6. 管理職の配慮

研究授業において管理職は、各学年の研究目的を大切に、子どもたちの実態や教材研究、さらには研究テーマとの関連性を常に意識していた。また、全教員の共通理解のもとで研究協議ができるように、授業前後には推進委員会だよりを発行した。そして、保護者に対しては授業公開を実施したり図工新聞を発行したりするなど研究授業での子どもの取り組みを伝える試みも行っていった。

7. 校内研究を効果的に行うポイント

子どもだけでなく全教員にも研修による学びがあることが明らかとなった。そこで、本実践をもとに校内研究を有効に進めるためのポイントを検討した。具体的な内容を以下に示す。

- ①テーマの設定：日常的な子どもの活動を把握し、学習指導要領や学校目標との関連をもたせながら全教員の問題意識にそってテーマを設定する。
- ②組織体制：研究を推進する中心的な組織をつくり、役割を明確にし、組織の中での検討案を分科会や学年部会などを通じて全教員と共有する。
- ③研究授業の方法：研究授業の検討会では、様々な教員の意見を議論に反映できるように色分けした付箋を用いて、それらの付箋に書かれた意見を模造紙に貼るなどして教員同士の意見交換を容易にする。
- ④研究主任と研究推進委員の役割：研究主任は校内研究を推進するための技量をもち、さらに研究指定科目に対する専門的な知識があり、評価を明確にして個々の教員が研究授業の成果を確認できるようにする。研究推進委員は研究主任の意向を汲みながら、学内全体に研究体制が浸透していくように関わる。

⑤管理職の役割：管理職は校内研究を通して各教員の役割を認め、研究組織が適切な方向に進んでいるかどうかについて関係の調整を図り、教員間で困難が生じたときに適宜助言を行う。

8. 本研究のまとめ

川崎市教育委員会によって指定をされた図画工作科教育研究推進校での実践を精査して、教師の学びを検討した。学年差があり、低学年では子どものペースにあわせて作品づくりを調整すること、中学年では新しい素材が学習意欲を高めること、高学年では鑑賞による客観的な把握や子どもの興味にそった題材選択の大切さを学んでいた。研究実践者の役割によっても学びの相違がみられ、研究主任は研究指導の専門性を向上させ、子どもの成長を実感し、研究推進委員は子どもの実態にあったテーマ設定の重要性を学んでいた。一般教員も授業づくりの理解を深めていた。それぞれの役割において共通していた学びは、人間関係を良好に保つことの重要性であった。多忙な職務をこなしていく中で、教員が校内研究を行っていくためには、教員間の関係性を良好に保つことが重要であることが明らかとなった。

校内研究を効果的に推進するポイントについて、テーマの設定、組織体制、研究授業の方法、研究主任と研究推進委員の役割、管理職の役割の5つの観点から論じた。今後、様々な教科の校内研究事例を検討し、有効な研究方法を明らかにすることで、教員自身がより多くのことを学べるように援助していきたいと考えている。

引用文献

- 降旗 孝 (2011). 小学校・図画工作を指導している教師の意識と実態—山形県・教員免許状更新講習から—山形大学紀要, 15, 185-202.
- 川崎市立東大島小学校 (2014). 平成24・25年度川崎市教育委員会研究推進校図画工作科「自分をいきいきと表現し、学びあう子」図画工作科研究紀要.
- 文部科学省 (2011). 小学校新学習指導要領・第2章各教科・第7節図画工作

<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/zu.htm> 2014年9月.

(2014.9.24 受稿, 2014.10.8 受理)